轆轤首

田中貢太郎

青空文庫

一

肥後の菊池家に磯貝平太左衛門武行と云う武士があった。頗る豪勇無雙の士であったが、主家の滅亡後、何を感じたのか仏門に入って、怪量と名乗って諸国を遍歴した。

甲斐の国を遍歴している時、某日唯ある岩山の間で日が暮れた。そこで怪量は恰好な場所を見つけて、笈をおろして横になった。

横になる間もなく月が出た。その月の光が四辺に拡がったかと思うと、その光の中から湧いて出たように黒い影が現れた。木樵らしい男だった。その男は周章てたようにして怪量の傍へ往った。

「御出家、此処で野宿なさるおつもりか、とんでもないこと、此処は恐ろしい魔所でござるぞ」

怪量はおちつきすましていた。

「それは面白い、狐が出るか、狸が出るか、それは知らぬが、左様な妖怪変化の出る場所へ野宿してこそ、諸国修行の甲斐があろうと申すものじゃ、かまわぬ、わしにかまわず、そうそう往かっしゃい」

男は怪量の顔を咎めるようにして覗きこんだ。

「大胆にも程のあるお方じゃ、此処へ野宿などされたら、それこそじゃ。さいわい近くにわしの住いがござる、荒屋ではあれど、此処よりはましじゃ、それに君子は危きに近寄らず、増上慢は、御仏もきつくお誡めのはずではござらぬか」

怪量はごそりと起きて笈を肩にした。

「それでは一つ厄介になろうかの」

「では足元に気をつけて、おいでなされませ」

岩山の間の道を攀じのぼって、やがて唯ある頂上の平べったい処へ出た。そこに草葺の家があって家の中から明るい灯が漏れていた。男は怪量を案内して裏手へ廻って往った。其処にすこしばかり野菜をつくった畑があり、畑の向うに杉の林があって、其処から筧の水を引いてあった。二人はその筧の水で足を洗って内へ入った。

炉の附近に四人の男女が控えて為た。男は怪量を上座へ請じてから四人を揮り返った。

「旅の御出家をお伴れ申したのじゃ、御挨拶申せ」

四人の者は交る交る怪量の前へ出て挨拶した。いずれも言葉は上品で態度もいやしくなかった。その後で女達は怪量に粥の膳をすすめた。怪量は無造作に粥を啜って、終ると口を拭い拭い主人の方を見た。

「御主人、先刻から御容子を伺うに、どうやら世の常の木樵衆とも見受けられぬ、以前は一花咲かした侍衆が、よくよくの仔細あっての山住いと睨んだが、いかがじゃ」

「それをお訊ねなされるか」

男は当惑したようにしていたが、やがて思いきったように顔をあげた。

「これも何かの縁、罪障消滅のたしになるかも判り申さぬ、それでは聞いて頂こうか。お察しの通り、以前はさる大名に仕えた侍でござったが、ふとした事から酒と女に心を奪われ、結局の果は何人かの者に手をかけて、この地に隠れておる者でござるが、時が経つにつれて浅間しく、邪慾のために、祖先を辱かしめたるこの身が恨めしゅう、此の比では、つくづくと後世のほども案じられてなりませぬわい」

「どうやら床しい御仁体と見受け申したが、さては左様でござったか」

怪量は凝と対手の顔を見た。

「いや、若気の誤は人間の常でござるわい、それにしても早くそれに気が注かれたは、まだ御仏の助けの綱の断れぬ証しでござろう。昔のことは昔のこと、此上は御仏にすがって、再び花咲く春を待たるるがよろしゅうござるぞ」

「身に沁みてのお言葉、忝けのうござる」

山上の夜は更けた。女達は次の間へ怪量の衾をのべた。すすめられるままに怪量はその部屋へ入った。

「一夜の礼じゃ、せめて読経致して、主人の苦悩を助けて取らそうか」

枕頭に端座して低声で読経をつづけたが、やがてよして窓を開けた。静な月の下に筧の水音ばかりが四辺の静寂を破っていた。

「咽喉が渇いたようじゃ、彼の水を飲んでまいろう」

怪量は家の者を起さないように、そっと襖を開けて次の間へ出た。その途端に怪量は棒立になった。其処には行燈の燈に照らされて、主人はじめ五つの首のない体がころがっていた。

「はてな、すぐ隣りにいたのに、これは何としたものじゃ」

怪量は四辺に用心しながらその傍へ近づいた。そして、一つ一つ首の附根を改めてみた。首は合せ物が離れたように血の痕もなければ刃物の痕もなかった。怪量の眼が光った。

「轆轤首じゃ、さてはたばかって、わしをおびき寄せたな」

怪量は閃となってそれを見据えたが、やがてその眼がきらりと光った。

「うむ、捜神記か何かで読んだぞ、万一轆轤首の骸を見つけた時、その骸を即刻別の場所へ移しておくがよい、首が骸を移されたのを知れば、恐れ喘いで、三たび地を打って死ぬとあったぞ。よし、妖怪め」

笑が怪量の頬にのぼった。やにわに主人の体を抱きあげたかと思うと、窓を開けて谷底へ投げ飛ばした。投げ飛ばして怪量は家の中を見まわした。戸締は皆中から厳重に出来ていた。

「さては天窓から出おったか」

怪量はそっと裏口を開けて外へ出た。外の黒々とした杉林の中から話声が聞えて来た。怪量は物陰から物陰を伝ってそれに近づいて往った。

月光の影まばらな林の中には、主人の首をはじめ五つの首が人魂のように飛び廻っていた。みんな面白そうに笑いながら、地上や樹から虫か何かを探して喫っているのであった。

怪量は喰い入るような目で見守っていた。と、主人の首が物を喫うことを止めて他の首を揮りかえった。

「そろそろ彼の坊主を啖いたいものだな、彼奴め、わしの言葉を真に受けやがって、頼みもせぬ経をはじめおった。経を読んでる間は近寄れないが、もう追っつけ黎明に近い、坊主ももう睡ったに相違ない、睡っていたらお前達にも、彼の太った旨そうな奴を啖わしてやる、何人か往って容子を見て来い」

一つの首が合点合点して舞いあがり、蝙蝠のように家の方へ飛んで往ったが、間もなくあわただしく飛び帰って来た。

「大変じゃ、大変じゃ、彼の坊主の姿が見えませぬぞ、何処かへ往ってしまいましたぞ、いや、そればかりか、大将の体を奪って往っ

たのか、いくら探しても、大将の体は見えませぬぞ」
　主人の髪が逆立った。
「なに、おれの体が見えぬ、さては、やられたか」
　主人は歯ががちがちと鳴って、その眼からは涙が出た。
「おれは、もう、元もと通りになることができぬ、此処で死ななければならぬ、よくも、人の体を動かしおったな、乞食坊主め。よし彼の坊主を啖い殺してやる、何処におる、坊主め」
　主人の首は空へ舞いあがるなり、恐ろしい形相で四辺を睨みまわした。
「おお、其処におる、其処におる、おのれ坊主め、動くな」
　ひゅうと風を切って怪量に飛びかかった。それに続いて四つの首も襲いかかった。
　怪量は手ごろの松の木を引っこ抜いて、縦横無尽に振りまわした。四つの首はまたたく間に地上へ落ちたが、主人の首だけは落ちずに、いつまでも怪量に飛びかかっていたが、やがて隙を見つけたのか怪量の衣の袖へ啖いついた。怪量はすかさず髷を掴んで力一ぱい撲りつけた。首は一声呻くなりぐったりとなってしまった。
　怪量はそのまま松の木を提げて家の内へ入って往った。四つの首はもう体へ帰って、血だらけになって呻き苦しんでいた。
「坊主が来た、坊主が来た」
　四人は我さきにと飛びだして、杉林の方へ姿を消してしまった。
　その時はもう夜がほのぼの明けていた。怪量は松の木をすてて首を衣の袖から離そうとしたが、首はどうしても離れなかった。怪量は笑った。
「貴様はおれと同伴におりたいか」
　怪量は首を袖へつけたままで山をおり、それから信州の諏訪へ出て平気で村から村を托鉢してまわった。
　血で汚れた鬼魅悪い首を見て女達は逃げ走った。村の騒ぎが大きくなったので、土地の役人が出て来た。
「坊主、その首はどうしたものじゃ」
　怪量はにこにこするのみで何も云わなかった。役人達は怪量を不敵な曲者として捕え、翌日白洲へ引き出した。
「売僧、その袖の首は、何としたものじゃ、僧侶の身にあるまじき曲事、有体に申せばよし、偽り申すとためにならぬぞ」
　怪量は役人を見て笑った。
「いや、これは轆轤首と申す妖怪の首でござる。これへついておるのは、妖怪の方から勝手に啖いついたまでで、拙僧の知ったことではござらぬ」
　怪量は詳しく当時の模様を語した。時どき自分で可笑くなると見えて大声を出して笑った。怪量を取り調べていた役人は同僚と何か相談した。そして、向き直って怪量を睨みつけた。
「売僧、そのような無稽な申し立て、此処では通らぬぞ、察するにその方、僧侶の身にあるまじき殺生を犯した故、死者の妄執晴れやらず、それへ止まっておるに相違あるまい、処の法に照らして所刑する」
「いや待たれい」
　その時まで控席に黙々としていた年老いた役人が進み出た。
「まだ御詮議不充分と見受け申す、一応、首を改めて見ましょうぞ」
　老役人は下役人に云いつけて、衣ごと首を手元へ取り寄せて見守っていたが、やがて驚いたように顔をあげた。

「これこそ、まごう方なき轆轤首、南方異物志に、轆轤首の項には赤い文字が見られるとあるが、御覧なされい、これこの通りじゃ、また、離れ口が木の葉の自然と枝から離れたるがごとき模様といい、それに甲斐の国には、昔から轆轤首がおると申すから、まさしくこれは轆轤首、それなる御僧の申し立ては、いつわりではござらぬぞ」

役人達は、顔を見合わせた。老役人は怪量の方へ膝を進めた。

「旅の御僧、もはやそなたへの疑いは晴れ申したが、さるにても、斯様は怪物を見事に御退治めされたとは、尋常の出家ではござるまい、お差しつかえなくば、俗名をうけたまわりたい」

怪量は微笑した。

「疑いが晴れて何よりでござる、お訊ねを受けて名乗る程の者でもござらぬが、いかにも以前は弓矢取る身、九州菊池の一党にて、磯貝平太左衛門武行が成れの果てでござりますわい」

「なに、磯貝平太殿」

役人達は顔色をかえた。鎮西の剛の者磯貝平太の名は、この地まで聞えていたのであった。

役人達は慌て白洲へ飛び降りて、怪量の縛めを解いて無礼を詫びた。

二

やがて怪量は国守の館へ呼ばれて滞在数日、無上の面目を施して出発した。

それから三日目の深夜、怪量は木曾の山中を歩いていた。

突然木立の間から怪しい漢が白刃を手にして躍り出た。

「坊主、身ぐるみ脱いで失せおろう」

怪量はちらりと対手を身ながら衣を脱いでさしだした。

山賊はすぐ衣の首に気が注いて、その首と怪量の顔を見比べていたが、何と思ったのか飛びしさってひれ伏した。

「仮父、飛んだ見損ないをいたしました、御勘弁を願います、これこの通りでござります」

怪量は面白そうに山賊を見た。

「何じゃ、どうしたのじゃ、人を裸にしておいて謝る奴があるか」

「いいえ、めっそうもない」

山賊は頭を掻いた。

「こんな度胸のいい仮父衆を、ただの乞食坊主と間違えて、穴があったら入りたいくらいでござります、それにしても仮父、人を殺して、衣の袖へその首を付けて脅しの道具にするたあ、うまい術もあったものだ、どうでしょう、俺のこの着物へ五両つけて仮父に差しあげますから、首の附いたその衣を俺に譲ってもらいたいものだが」

「なに、首を譲ってくれ、欲しくばやるが、これは人間の首ではないぞ、妖怪の首じゃぞ、普通の者では扱いかねる代物じゃが、それでよいか」

「人が悪いや、人を殺して、首を袖につけて、そのうえ人をからかうのだもの、それでは仮父、この通り、五両と着物をさしあげます、冗談云わないで、早いとここれで手を打ってくだせえまし」

「そうか、それほどまでに所望なら代えてやろうか、じゃが、五両出して妖怪の首を欲しがる奴は、天下広しといえども貴様だけだろうよ、自由にせい」

三

首と衣を手に入れた山賊は、暫くその二品を資手に、木曾街道の旅人を劫していたが、間もなく諏訪の近くへ往って首の由来を聞いた。山賊は青くなった。

「やっぱり坊さんの云ったことが真箇だったのか、飛んでもない、こんな首を持っていたら、どんな祟りを受けるか判らぬ。せめてこれを体と同体にしてやって、祟りのないようにしてもらおう」

山賊は話に聞いた山の中へ入って、怪量が泊ったと云う轆轤首の家を探しているうちに、やっと探しあてたが、其処には轆轤首の体は一つもなかった。

「仕様がない、せめて首だけでも此処へ葬ってやれ、それにしても彼の坊さんは、妙な坊さんだ、ひょっとしたら、あれは、おれに悪事を止めろっていう、仏のお使いかも判らないな」

首を埋めて塚を築くと、山賊は首をひねりひねり其処を立ち去った。その塚は後世まで残っていて『ろくろ塚』と呼ばれていた。

青空文庫情報

底本：「怪奇・伝奇時代小説選集3　新怪談集」春陽文庫、春陽堂書店
　　1999（平成11）年12月20日第1刷発行
底本の親本：「新怪談集　物語篇」改造社
　　1938（昭和13）年
入力：Hiroshi_O
校正：noriko saito
2004年9月25日作成
青空文庫作成ファイル：
このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

轆轤首

田中貢太郎

2026年10月1日　第二版

奥　付

発行　　青空文庫

URL　　http://www.aozora.gr.jp/
E-Mail　　info@aozora.gr.jp

作成　　青空ヘルパー　　赤鬼@BFSU
URL　　https://aohelp.club/
BiliBili　　https://space.bilibili.com/10060483

Special Thanks
　青空文庫　威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー http://aohelp.club/
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
http://tokimi.sylphid.jp/